となる再現性あるモデルが得られた．

4. Radioesophagogram (REG) による食道機能検査

村木　俊雄　下原　康彰　田淵　博己
丹野　宗彦　外山比南子　千葉　一夫
村田　啓　山田　英雄（都養育病院・核放）

RIを用いた食道機能検査 radioesophagogram (REG) を，嚥下・通過障害を訴える者，食道癌患者，gastroesphageal reflux の疑われる者に対して施行した．被検者を臥位とし，^{99m}Tc-sulfur colloid 3 mCi を蒸留水 10 m*l* とともに口に含ませ，一度の嚥下運動で飲み込ませた後，データをディスクに収納しコンピュータ処理を行った．シンチグラムは 0.5 秒間隔にて50秒間撮影した．咽頭下部にマーカーを置き，E-C junction との間を三等分しておのおの上部 (PROX)，中部 (MID)，下部 (DIS) に ROI を設定し，さらに胃 (STOM) を加えて time activity curve を描き，transit time，通過障害の有無などを比較検討した．また，成人健常者にも同様の検査を施行して対照群とした．成人においては上部～下部へと bolus はきわめて速やかに移動し，直ちに噴門を通過し胃に流入した．軽度の狭窄が見られた食道癌の一例では，食道癌上部にて一度停滞像を示したが狭窄部は速やかに通過して食道下部より胃へは直ちに流入した．また，液体の嚥下に困難を訴えた一例では，RI は食道下部，中部，時には上部にまで振子様に移動し，臥位においてはほとんど胃に流入せず食道運動機能の異常 EMD (esophageal motility disorder) を認めた．

本法は生理的状態で，患者に与える苦痛もなく短時間で施行できることから食道疾患を疑う際のスクリーニング法として適した方法と思われる．

5. 食道癌術後に発症した骨軟化症の骨シンチ像

酒井　文彦　小野　慈　朝倉　浩一
小田保邦雄　松井　謙吾　（横市大・放）

われわれは食道癌手術後に，高 Al-P 血症を来し，骨転移と最初誤診した，72歳，女性の骨軟化症の一症例を経験したので報告する．

昭和49年5月胸部食道全摘術，胸骨後準全胃再建が行われ，7月に退院したが食事は全粥やうどんなど流動物しか摂取できなかった．

外来での経過観察中，昭和54年6月に血中 Al-p は 1223 mu/m*l* と著増を示し，骨転移を疑い施行された胃シンチグラムで多発性の hot spot が認められたため，最初多発性骨転移と診断された．ところが，骨 X 線検査では，多発性骨折・変形・Looser's zone が見られ，またその後の骨シンチグラムで改善傾向が認められたため，高 Al-p 血症の原因は骨転移ではなく，術後の食事性骨軟化症であることが推定された．

悪性腫瘍の経過観察中に，骨シンチグラム上多発性の hot spot を認めた場合，骨転移だけでなく副甲状腺機能亢進症・腎性骨異栄養症・骨軟化症等代謝性骨疾患も念頭に置いて，詳細な問診，血液，尿生化学検査，骨X線検査などを行う必要がある．

6. 腎シンチグラムの際にみられる腎外性集積像について

李　漢栄　穎川　晋　藤野　淡人
池田　滋　石橋　晃　（北里大・泌）
黒川　純　（城西歯大・外）

^{99m}Tc-DTPA を用いた腎シンチグラム上で，尿路外に異常集積を示す症例を経験したので報告した．一例は，腎癌の症例で，骨盤部に血流相で著明な集積があり，X 線 CT および血管造影で同部の転移が確認された．他の一例は，腎移殖後の急性尿細管壊死の状態に施行した腎シンチグラフィーで，陰茎根部に担当すると思われる部分に，機能相と排泄相の時期に集積を認めた．この機序は明らかでないが，移植や合併症にともなう血行動態の異常もその一助になっていると思われた．

腎シンチグラムでは，単に尿路の情報だけでなく，このように尿路外の所見も知ることは，臨床上その検査の価値を高めることにもなり，今後とも症例を重ねて検討したいと考えている．

Presented by Medical*Online